農と暮らしの新たな視点を探る

産直コペル

sanchoku coper

2019.9 Vol.37

『土壌まるごと発酵』を目指して
―農業生産法人 小松沢レジャー農園
（埼玉県秩父郡横瀬町）町田恒夫さんに聞く―

土から育てる vol.25

売上データの分析・活用方法を探る 第19回
データ分析 先進地＝愛媛県セミナーに集まろう！

特集 子育て×農業

子育て農業者の一日 「子育てを自然豊かな場所で」自給的暮らしを目指して就農

子育て世代の雇用の場としての農業 農園にかかわるすべての人を幸せにしたい（与古美農園）

十勝で展開する大規模有機畑作経営

――東京農工大学　野見山敏雄――

6月下旬、食糧の生産と消費を結ぶ研究会（生消研）の夏の現地学習交流集会で北海道十勝地域を視察した。視察した経営はどれも都府県とはスケールが大きく異なっていた。なかでも、有機農業（自然農法）を実践する畑作経営は異色だった。

（株）折笠農場は、1909年福島県相馬市から入植した折笠久治郎さんが初代で現在の健（ますらお）さんが5代目になる。3代目までは農地の開拓に尽力し、4代目の秀勝さんが京都の洛南生協と取引を始めてから、全国の生協やスーパーマーケット、自然食品販売店、レストランなどチャネルを開拓していった。

経営の転機となったのは、『奇跡のりんご』で知られる木村秋則さんが1998年頃に折笠農場を訪問したことである。当時、ビートの単収が2年連続で北海道1位に輝いたが、秀勝さんは化学肥料を多投することで地力の低下を感じていたという。そのため、農地を開拓時代の豊かな土に戻す農法を探っていた時に木村さんが訪問したのである。

2003年から農薬と化学肥料を使用しない自然農法へ転換する農地を増やすようになった。自然農法では肥料もエンバクなどの緑肥以外は使用しない。生産規模は95ヘクタール、うち有機JAS認証圃場が33ヘクタールで、特別栽培圃場が62ヘクタールとなっている。有機栽培圃場には大豆、小豆、小麦、バレイショ、黒大豆、黒千石大豆、りんごを栽培している。特別栽培圃場には、バレイショ、大豆、緑肥を栽培し、小麦→豆類→バレイショの輪作を行っている。JAS有機認証は2011年、JGAPは2018年に取得している。

これだけの大規模経営になると農業機械も巨大で、トラクター7台、スプレーヤ2台、ショベルローダ3台を所有している。通常のトラクターでは1日2ヘクタールの耕耘がやっとだが、280馬力の大型トラクターなら1日15ヘクタールも耕耘できるという。従業員は正社員3名のほかに約3名のアルバイトが働いているという。

これらの生産物は直接販売するほかに、醤油、味噌、豆腐、納豆などの食品加工メーカーに出荷し、化学物質過敏症の人達に役立っている。バレイショを酢に加工するメーカーとも試作を行い、有機マスタードの加工場を計画中だという。

また、安全と美味しさという顧客目線の有機食品をモットーにしている。折笠健さんは、しゃべりだすと止まらない情熱家でもあり、「十勝が変われば、日本が変わる」という強い意志を持つ、日本農業の変革者でもある。

GPSを利用して、まっすぐに播種された大豆

販売している商品の一部

大型トラクターの前で説明する折笠健さん

野見山敏雄さん

東京農工大学大学院農学研究院教授

東京農工大学で教鞭をとっており、最近の研究テーマは、自然災害激烈下における契約産地のレジリエンスと産直の再定義である。主な著書には、産直商品の使用価値と流通機構（日本経済評論社）や食料・農業市場研究の到達点と展望（筑波書房，共著）など多数。2012年より地産地消優良活動表彰審査委員会・委員、17年から委員長を務めている。